



ひと ^{ひと}と ^{ひと}男の広場
女

ねとねとく

NO.22

目 次

特集 夫婦別姓を考える	2
◇あなたはどちらを選ぶ夫婦同姓と別姓	6
ウォッチング	8
ぐる〜ぶねっと	10
情報誌あれこれ	12
国際プラザ	13
本だな	14
シフォン・あとがき	15
静岡県女性総合センターオープン	16



静岡県

夫婦別姓を考える

「夫婦別姓」、最近よく耳にする言葉ですが、「私には関係ない」と考える女性やその意味を知らない人が、案外多いのではないのでしょうか？

しかし、「夫婦別姓」は女性の生き方、夫婦のあり方、しいては家族・戸籍制度にまでかかわる大きな問題なのです。

女性の社会進出の増加やライフスタイルの多様化などにより、姓を変えることに疑問や不便を感じたり、また、男女平等の考えから、結婚をしても旧姓（通称）を使用する人、婚姻届を出さない結婚（事実婚）を選ぶカップルが出てきています。しかし、通称使用や事実婚の場合、書類上の煩雑さやトラブル、相続や身分保障など問題点も少なくありません。

現在、法制審議会で検討されているこの問題を私たちの身近なところから一緒に考えてみたいと思います。

夫婦別姓を考える



夫婦別姓は時代の流れ

渡邊 弥生 さん

(静岡大学教育学部助教授)

渡邊さんは、大学で、結婚後も旧姓で仕事をしていらっしやいます。若いころは姓が変わることに對して特にこだわりはなかったのですが、研究職という仕事を続けていく上で、論文の発表などの実績に連続性を持たせることや改姓による周囲の混乱を防ぐために、旧姓をそのまま通称として使用しています。事実、資料を集めるときなど、研究者が女性の場合、似たような内容の研究が、同一のものかどうか分からなくて困ることがあるそうです。

仕事とプライベートで姓を使い分けると、出産の際や免許証など書類上の統一性がなく不都合な場合があるとのことですが、それ以外は旧姓(別姓)によるメリットの方が多くそうです。

「男性が結婚で姓を変えたくないのと同様、やはり女性も親しみ深いものから離れることは、人間の自然の欲求として抵抗があると思います。特別なメリットもないのに、自分の意に反して昔ながらの方法(改姓)に合わせるのには意味がないと思います。家族が核家族化したり、また、社会が変化している中で、改姓の合理的な理由がなくなってきたのではないのでしょうか。」と。

また、夫婦が別姓になった場合の家族の一体感については、「同姓でも心がバラバラの家族があります。姓が違ってても仲よくやっつけているのが本当の家族だと思います。形ではなく心のつながりではないでしょうか。」と話してくださいました。

最後に、夫婦別姓選択制の法制化については、「夫婦別姓が一般的になれば、男女の意識が変わり、互いに自主性が出てきて、本来の意味での男女平等に近づいていくと思います。価値観が多様化している今、人の生き方に対する偏見もなくなるかもしれません。

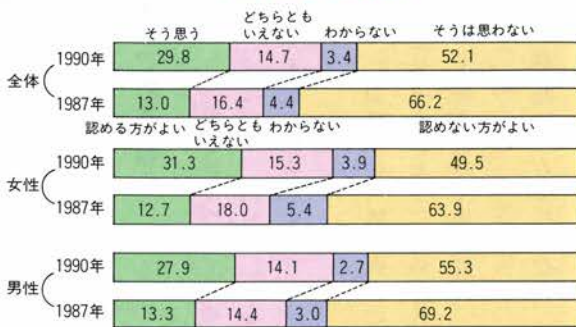
今後、家族に関する法律が整備されて、別姓選択制が制度化することを望んでいます。

制度は、社会や人々の意識の変化とともに変わっていくべきものだと思います。」と結ばれました。

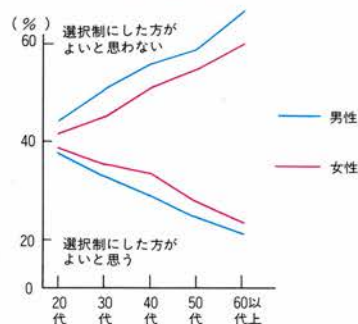
夫婦同姓・別姓を選択制にした方がよいと思うか

—前回調査との比較—

総理府「女性に関する世論調査」1990年9月



—年齢別—



別姓を応援しています

柿田 友広 さん

(百町森書店代表)



柿田さんは、奥様が姉妹の長女であるため養子に入られました。旧姓を通称として使っていらつしやいます。結婚の際、御自分の姓が変わることに抵抗はなく、また別姓に対しても大きな問題意識があった訳ではなかったそうですが、別姓のために肩身の狭い思いをしたり、同姓のために不利益を被ったりしている人たちを応援したいという思いで別姓にしていらつしやいます。奥様の御両親もそういう柿田さんを理解され、奥様同様「柿田さん」と旧姓で呼ばれているそうです。

「戸籍の問題は根が深いのですが、西欧で住民票ひとつで市民権が保障されているのに対し、日本で別姓制度を問題にしなければならぬのは、今だに女性の地位が低いからではないでしょうか。別姓にしている不都合な点は、書類上はすべて戸籍名でなければ

ならないこと、ほかには特にありません。良い点は、独身時代からの仕事上での実績をそのまま継続できることなどのほかに、妻と個としてつき合えること。精神面でお互いに自立しやすく、相手に対して自分を意識化することによって、夫婦にありがちな所有意識がなくなります。例えば、お茶も自分で入れるようになります。同様に家族においても、互いに個として見て愛情を感じることにつながっています。仮に子供が自分と違う姓になったら一抹の寂しさはあるかもしれませんが、それで愛情が薄れるものではなく、家族の愛情と姓の問題とは全く別、同じ土俵で考えることではないと思います。」と語り。

「別姓にすることによって、むしろ『家族』を意識し、家庭内での個を大切にしなければならぬということが見えてくるのかもしれないですね。」

別姓を使っているいろいろな出来事がありますが、使っていることが自分に与えたひとつの課題となっている側面もあります。

いずれにせよ、皆が個々を尊重し合えるようになるといいですね。」と穏やかでありながら、柿田さんの信念が伝わってくるお話でした。

「夫婦の姓」について、日本と外国その違いを調べてみました。

別姓にできる国

アメリカ合衆国 結婚と姓についての規則はなく、慣習として妻が夫の姓を名乗る。

中国 別姓、結合姓（両方の姓を合わせる）、同姓どれも選択可能である。

韓国 結婚による改姓はない。

同姓だが結合姓を認める国

ドイツ 夫婦は共通の姓とするが、結合姓として旧姓を残せる。

イタリア 夫の姓は不変だが、妻は結合姓となる。

同姓の国

日本 夫・妻どちらかの姓を選び同姓とする。

慎重に検討してほしい問題

宮城 佐江子 さん

(静岡銀行掛川東支店長)



宮城さんは、同行で初めて誕生した女性支店長です。お忙しい合間を縫って、第一線で働く女性としてお話ししてくださいました。

宮城さん御自身、結婚の際、今までの名前がなくなる寂しさ、姓が変わったことを取引先にその都度説明しなければならぬいわずらわしさを経験されました。しかし、今ふり返ってみれば、結婚し家庭を持ったことを知らせることで、信用が増した面もあると思われているそうです。

「世の中には様々な職業があります。別姓の方が良い仕事、同姓の方が適している仕事、両方あつて当然ではないでしょうか。少なくとも私は結婚によって姓が変わったことが障害になったことはないし、結婚によって現在の自分があるのだと思います。現在の職場で『夫婦別姓』に対し特に話題にのぼったことは、まだありません。」

とおっしゃっていました。

ただ、二十五歳になられたお嬢さんに結婚で姓が変わることについて尋ねられたところ「姓が変わると自分がなくなるみたいでイヤ。」と即座に答えられて戸惑い、若い世代の意識変化を感じられたそうです。

「とは言っても、この人と結婚し、その姓を名乗ることにあこがれている女性もまだまだたくさんいます。価値観が複雑になり人の生き方も多様化した時代だから、別姓を選択したい人は選択できるという『夫婦別姓選択制』が認められるのであれば、それはそれで良いと思います。」と話されていました。

しかし、一家の中で女性だけが姓が異なる場合家族の一体感をどう醸成させるのか、日本で深く根づいている戸籍制度あるいはそれにまつわる習慣はどうなるのか、気にかかるとはたくさんあるそうです。どれも重要なことであるからこそみんなが納得できるように形で結論を、と願っておられました。

一女性として働き、今は女性の多い職場の管理者として、長い経験に基づいて語られる宮城さんの御意見は、大変重みのあるものでした。

夫婦別姓について、分かりやすく書いてある本を紹介します。

「別姓結婚への選択」

勝部温子著 星雲社

突然、娘に事実婚をすると宣言された平凡な母親の驚きと嘆き、そして理解しようとする姿がユーモアたっぷりに描かれている。

「楽しくやろう夫婦別姓」

福島瑞穂・榊原富士子

福沢恵子著 明石書店
夫婦別姓の実践者である三人の女性が、家庭・職場・地域にあつてどう対処していくか、その心構えなどを語っている。

「別姓結婚物語」

諫山陽太郎著 創元社

別姓結婚した男の立場からその動機、周囲の反応など様々なエピソードが紹介されている。

「夫婦別姓はいかが」

福島瑞穂著 ピースネット企画

「女の姓を返して」

井上治代著 創元社

「婚姻改姓・夫婦同姓のおとし穴」

中村桃子著 勁草書房

「女性と戸籍」

榊原富士子著 明石書店